

注 意 事 項

1. 試験問題の数は 60 問で解答時間は正味 2 時間 30 分である。

2. 試験問題の持帰りを認めない。

3. 解答方法は次のとおりである。

(1) 各問題には a から e までの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを(例 1)では一つ、(例 2)では二つ選び答案用紙に記入すること。

(例 1) 101 県庁所在地 (例 2) 102 県庁所在地はどれか。

はどれか。

- a 栃木市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

2 つ選べ。

- a 宇都宮市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

(例 1) の正解は「c」であるから答案用紙の

101 ☐ a ☐ b ☒ c ☐ d ☐ e のうち ☒ c をマークして

101 ☒ a ☒ b ☐ c ☐ d ☐ e とすればよい。

(例 2) の正解は「a」と「c」であるから答案用紙の

102 ☒ a ☐ b ☒ c ☐ d ☐ e のうち ☒ a と ☒ c をマークして

102 ☐ a ☒ b ☐ c ☒ d ☐ e とすればよい。

(2) 答案の作成には HB の鉛筆を使用し、濃くマークすること。

良い解答の例…… ☒ (濃くマークすること。)

悪い解答の例…… ☐ ☐ (解答したことにならない。)

(3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。

(4) ア. (例 1) の質問には二つ以上解答した場合は誤りとする。

イ. (例 2) の質問には一つ又は三つ以上解答した場合は誤りとする。

(5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 妊娠 24 週の初妊婦。ハイリスク妊娠のため紹介され来院した。妊娠 10 週時の超音波検査で一絨毛膜二羊膜性双胎と診断されている。来院時、子宮底は 24 cm、子宮口は閉鎖している。超音波検査で第一児は推定体重 600 g、羊水ポケット 4 cm、第二児は推定体重 480 g で羊水ポケットは 1 cm である。両児ともに胎児水腫を認めない。

この双胎妊娠で認められるのはどれか。2 つ選べ。

- a 双胎間輸血症候群
- b 第一児羊水過多
- c 第一児心不全
- d 第二児羊水過少
- e 第二児発育遅延

2 33 歳、妊娠 30 週の 2 回経産婦。少量の性器出血と子宮収縮とを認めたため紹介状を持って来院した。前医で妊婦健康診査を受け、高血圧のためメチルドパ 500 mg/日を服用していた。来院時、血圧 164/96 mmHg。浮腫は脛骨稜に軽度認めるが、全身には及んでいなかった。内診で子宮口は 2 cm 開大、経膈超音波検査による頸管長は 15 mm、腔内容は白色透明であった。尿所見：蛋白 1 +、糖(－)。直ちに入院安静とし、メチルドパを 750 mg/日に増量しカルシウム拮抗薬も併用した。15 分周期の子宮収縮を認めたため、塩酸リトドリンを 100 μ g/分で持続点滴投与した。2 週後、腹部緊満感はやや軽減したが、血圧は 160/100 mmHg 前後の値を推移し最近上昇傾向にある。胎位は第 2 頭位。羊水穿刺によるマイクロバブルテストの結果は陽性である。胎児推定体重の推移(別冊 No. 1)を別に示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b 塩酸リトドリンの増量
- c メチルドパの増量
- d 副腎皮質ステロイド薬の投与
- e 分娩誘発

別 冊

No. 1 図

3 25 歳の女性。動悸、頭痛および立ちくらみのために来院した。7 歳のとき両親が離婚して養女に出され、いじめられた。中学 1 年のときに家出して以後、学校にはほとんど行っていない。15 歳で同棲、19 歳で入籍し 2 児をもうけた。仕事は一定せずアルバイトを転々としていたが、夫の不倫のために 3 年前離婚した。そのころ食欲がなくなってしまい、酒ばかり飲んでいて、1 か月で 10 kg やせた。その後今の夫と再婚して 1 児をもうけたが、3 か月前、夫にはかなりの借金があることが分かった。それ以来気分の落ちこみが激しく、ふさぎこむと寝てばかりで仕事も辞めてしまう。最近は酒量も増え、いらいらがひどくて子供たちに八つ当たりしてしまう。

この患者の病歴で該当しない精神障害はどれか。

- a うつ病
- b 適応障害
- c 統合失調症
- d 身体表現性障害
- e アルコール依存症

4 67 歳の男性。半年ほど前から、ほとんど毎晩のように、就寝後 1 時間ほどすると叫び声をあげ寝室を歩き回るようになった。家人が制止すると我に返り、再度眠りに就くが、まもなくまた叫びだす。日中は興奮することはない。軽度の静止時振戦が見られるが日常生活に不自由はない。改訂長谷川式簡易知的機能評価スケールでは 30 点満点中 24 点である。身長 165 cm、体重 58 kg。血液所見、血清生化学所見、脳波および頭部単純 MRI に異常はない。

夜間にみられる症状はどれか。

- a 睡眠時無呼吸
- b REM 睡眠行動障害
- c 側頭葉てんかん
- d 夜間せん妄
- e 振戦せん妄

5 10歳の男児。奇異な癖のために勉強できないということで母に連れられ来院した。5歳時にマリンバを演奏しながら肩を上げる癖で気付かれた。その後、まばたき、鼻をつり上げる、頭を振る、全身をふるわせる、咳払い、ハッハッ、ウッウッと声を出す、「死ね死ね。」と言うなどの多彩な症状が出現した。

この疾患について正しいのはどれか。

- (1) 強迫的な母親の養育態度に原因がある。
- (2) 睡眠障害を伴うことが多い。
- (3) てんかん性の脳波異常が高率にみられる。
- (4) 10歳代後半になると症状は軽減していく。
- (5) ハロペリドールが効くことが多い。

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

6 56歳の男性。1年前から前頸部に黒褐色の皮疹が生じ、次第に隆起し増大してきたため来院した。痒みはなく、出血や潰瘍を認めない。前頸部の写真(別冊No. 2A)と皮膚生検 H-E 染色標本(別冊No. 2B)とを別に示す。

診断はどれか。

- a 色素性母斑
- b 脂漏性角化症
- c Bowen 病
- d 基底細胞癌
- e 悪性黒色腫

別 冊
No. 2 写真A、B

7 2歳の男児。38℃の発熱とともに全身に紅斑を認め来院した。入院後、紅斑は全身に広がり、続いて薄紙を貼ったような水泡を形成した。経口摂取不良、不機嫌および発熱は持続している。口唇周囲の写真(別冊No. 3)を別に示す。

この患児にまず投与するのはどれか。

- a アルブミン
- b ヘパリン
- c セフェム系抗菌薬
- d 抗ヒスタミン薬
- e 副腎皮質ステロイド薬

別 冊
No. 3 写 真

8 55歳の女性。数日前からの右眼痛を訴えて来院した。5年前から関節リウマチで治療を受けている。数か月前から口腔乾燥感と両眼の異物感とを自覚している。視力は右0.6(矯正不能)、左0.7(1.0×-1.0D)。眼圧は両眼ともに15mmHg。前房、水晶体および眼底に異常は認めない。フルオレセイン染色後の前眼部写真(別冊No. 4)を別に示す。

みられる所見はどれか。2つ選べ。

- a 翼状片
- b 糸状角膜炎
- c 帯状角膜変性
- d 樹枝状角膜炎
- e 点状表層角膜炎

別 冊
No. 4 写 真

9 5歳の男児。難聴と言語発達の遅れとを主訴に来院した。出生後の精神・身体発育は順調であった。2歳時に髄膜炎と中耳炎とに罹患した。オーディオグラム(別冊No. 5)を別に示す。

難聴の原因はどれか。

- a 外耳道閉鎖症
- b 先天性真珠腫
- c 突発性難聴
- d 内耳炎
- e 機能性難聴

別冊
No. 5 図

10 13歳の男子。頸部腫瘍を指摘されて来院した。受診時の頸部写真(別冊No. 6A)と頸部造影CT(別冊No. 6B)とを別に示す。

診断はどれか。

- a 血管腫
- b ガマ腫
- c 正中頸嚢胞
- d 甲状腺腫
- e 神経鞘腫

別冊
No. 6 写真A、B

11 46歳の男性。発熱と咳嗽とを主訴に来院した。2か月前から労作時息切れと咳嗽とが出現していた。3週間の海外出張にでかけ、帰国後すぐに発熱し、39℃台の発熱が3日間持続した。次第に咳嗽と呼吸困難とが増強した。10年以上頻回に海外出張に行っている。意識は清明。呼吸数30/分。脈拍112/分、整。血圧128/74 mmHg。胸部聴診で異常を認めない。血液所見：赤血球460万、Hb 15.6 g/dl、Ht 50%、白血球3,500。血清生化学所見：AST 36単位(基準40以下)、ALT 32単位(基準35以下)。CRP 8.6 mg/dl(基準0.3以下)、β-Dグルカン 360 pg/ml(基準20以下)。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.44、PaO₂ 60 Torr、PaCO₂ 36 Torr。入院時の胸部エックス線写真(別冊No. 7A)と治療前の喀痰塗抹Grocott染色標本(別冊No. 7B)とを別に示す。

考えられる病原体はどれか。

- a 結核菌
- b 肺炎球菌
- c クラミジア
- d SARS コロナウイルス
- e ニューモシスチス・カリニ

別冊
No. 7 写真A、B

12 72歳の男性。発熱、嚥下痛および呼吸困難を訴えて入院した。数年前から糖尿病の治療中である。咽後膿瘍を認めたので、気管切開術後に膿瘍の切開排膿術を受けたが、呼吸困難が増悪してきた。人工呼吸器による呼吸管理と抗菌薬とによる治療にもかかわらず、呼吸状態の改善と解熱とがみられない。体温 38.8℃。脈拍 96/分、整。血圧 146/90 mmHg。動脈血ガス分析(FiO_2 0.8) : pH 7.32、 PaO_2 88 Torr、 PaCO_2 46 Torr、 BE -5.6 mEq/l。胸部エックス線写真背臥位像(別冊No. 8 A)と胸部単純 CT(別冊No. 8 B)とを別に示す。

次に行うべき処置はどれか。

- a 心嚢穿刺
- b 人工心肺装着
- c 気管支肺胞洗浄
- d 縦隔ドレナージ
- e 胸腔ドレナージ

別 冊
No. 8 写真 A、B

13 46歳の女性。呼吸困難のため来院した。数年来、関節リウマチに対して副腎皮質ステロイド薬による治療を受けていたが、急激に呼吸困難が増強してきた。胸部エックス線写真(別冊No. 9 A)と気管支肺胞洗浄液 Papanicolaou 染色標本(別冊No. 9 B)とを別に示す。

診断はどれか。

- a 肺胞出血
- b 薬剤性肺臓炎
- c 肺血栓塞栓症
- d サイトメガロウイルス肺炎
- e ニューモシスチス・カリニ肺炎

別 冊
No. 9 写真 A、B

14 34歳の女性。呼吸困難を主訴に来院した。生来健康であったが、3年前から労作時に軽度の息切れを感じ、徐々に増強した。喫煙歴はない。脈拍 96/分、整。血圧 110/80 mmHg。胸部打聴診では異常を認めない。腹部は平坦で腫瘤を触知しない。血液所見：赤血球 432 万、Hb 15.0 g/dl、Ht 38 %、白血球 4,600、血小板 22 万。血清生化学所見：AST 30 単位(基準 40 以下)、ALT 40 単位(基準 35 以下)、LDH 220 単位(基準 176~353)。スパイロメトリ：%VC 95 %、 $\text{FEV}_{1.0}$ % 62 %。胸部エックス線写真(別冊No. 10 A)と胸部単純 CT(別冊No. 10 B)とを別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 過誤腫性肺脈管筋腫症
- b 肺好酸球性肉芽腫症
- c サルコイドーシス
- d 気管支拡張症
- e 肺気腫

別 冊
No. 10 写真 A、B

15 34歳の男性。発熱、咳および喀痰を訴えて来院した。小児期から喘息発作を繰り返している。2週間前から38.0℃の発熱があり、咳と少量の膿性痰とを伴っている。胸部聴診で右肺に wheezes を聴取する。血液所見：白血球 21,000 (好中球 28%、好酸球 52%、単球 5%、リンパ球 15%)。血清生化学所見：IgG 1,450 mg/dl (基準 960~1,960)、IgM 352 mg/dl (基準 65~350)、IgE 662 IU/ml (基準 250 以下)。Aspergillus fumigatus に対する血清沈降抗体陽性。喀出された気管支の铸型様の栓子から Aspergillus fumigatus が分離された。胸部エックス線写真で右中肺野に浸潤影を認める。

最も適切な治療法はどれか。

- a 経口副腎皮質ステロイド薬投与
- b 吸入副腎皮質ステロイド薬投与
- c 経口抗真菌薬投与
- d 抗真菌薬の気管内注入
- e 吸入気管支拡張薬投与

16 65歳の女性。歩行中バイクにはねられ右大腿の疼痛を主訴に救急車で搬入された。既往歴に特記すべきことはない。意識は清明。身長 156 cm、体重 58 kg。右下肢を動かすと右鼠径部に激痛を訴えるほかは異常所見はない。尿所見に異常はない。血液所見：赤沈 10 mm/1時間、赤血球 450 万、Hb 12.6 g/dl、白血球 8,000、血小板 22 万。血清生化学所見：総蛋白 6.8 g/dl、アルブミン 4.6 g/dl、尿素窒素 16 mg/dl、クレアチニン 1.0 mg/dl、AST 28 単位(基準 40 以下)、ALT 22 単位(基準 35 以下)、Na 140 mEq/l、K 4.2 mEq/l、Cl 102 mEq/l。CRP 0.2 mg/dl (基準 0.3 以下)。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.40、PaO₂ 88 Torr、PaCO₂ 40 Torr、BE -1.0 mEq/l。

右大腿骨頸部内側骨折に対して人工骨頭挿入術を行った。創部痛が強かったため術後3日間ベッド上安静とし、4日目から歩行訓練を指示した。リハビリテーション室に行くため、車椅子に移乗させた時、急に呼吸困難を訴えうずくまった。胸部エックス線写真と心電図とに明らかな異常はなく、動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.38、PaO₂ 50 Torr、PaCO₂ 47 Torr、BE -4.0 mEq/lであった。

適切な検査はどれか。2つ選べ。

- a 心エコー検査
- b 呼吸機能検査
- c 胸部造影 CT
- d 胸部単純 MRI
- e 胸部エックス線断層撮影

17 65歳の男性。血痰を主訴に来院した。数年前から咳があった。数日前に少量の血痰が出現した。喫煙は30本/日を45年間。身長172 cm、体重60 kg。胸部の身体所見に異常はない。CEA 5 ng/ml (基準5以下)、SCC 12.0 ng/ml (基準1.5以下)。喀痰の結核菌検査と細胞診とは陰性である。胸部エックス線写真と胸部単純CTとに異常を認めない。

診断のため最も適切な検査はどれか。

- a 気管支鏡検査
- b 気管支造影
- c 気管支動脈造影
- d 胸腔鏡下肺生検
- e CTガイド下針生検

18 12歳の女児。学校の健康診断で心雑音を指摘された。自覚症状はない。心尖部からとられたカラードップラー心エコー図(別冊No. 11)を別に示す。

みられるのはどれか。

- a ばち指
- b II音の奇異性分裂
- c 肺動脈弁領域の駆出性収縮期雑音
- d 左室拡大
- e 不完全左脚ブロック

別冊
No. 11 写真

19 1歳3か月の男児。心雑音とチアノーゼとを主訴に入院した。生後3か月ころからチアノーゼが目立つようになり、啼泣時にぐったりすることがあった。身長78 cm、体重9 kg。脈拍112/分、整。前胸部に3/6度の収縮期雑音を聴取する。赤血球450万、Hb 12.5 g/dl。心エコー図(別冊No. 12)を別に示す。

適切な治療法はどれか。

- (1) 昇圧薬投与
- (2) β 受容体遮断薬投与
- (3) 肺動脈狭窄解除術
- (4) 心室中隔欠損閉鎖術
- (5) Jatene手術

a (1)、(2)、(3)

b (1)、(2)、(5)

c (1)、(4)、(5)

d (2)、(3)、(4)

e (3)、(4)、(5)

別冊
No. 12 写真

20 59歳の男性。通勤時に駅の階段を昇っていたところ、意識を失い救急車で搬入された。2年前から労作時の息切れと胸部圧迫感とを自覚していた。5分位の安静で症状は消失するため放置していた。来院時、意識は清明。脈拍 96/分、整。血圧 100/64 mmHg。胸骨右縁第2肋間に最強点を有する4/6度の駆出性収縮期雑音を聴取する。心エコー図(別冊No. 13A)と心カテーテル検査所見(別冊No. 13B)とを別に示す。

適切な治療法はどれか。

- a 抗菌薬の投与
- b ノルエピネフリンの投与
- c 血栓溶解療法
- d 冠動脈形成術
- e 弁置換術

別 冊
No. 13 写真A、図B

21 76歳の男性。1か月前から次第に増強する呼吸困難と四肢冷感とのために来院した。6か月前に夜間、激しい前胸部痛があったが、1時間後に軽快したため放置していた。来院時、呼吸数 24/分。脈拍 96/分、整。血圧 98/64 mmHg。心雑音は聴取されない。胸部エックス線写真(別冊No. 14A)と心電図(別冊No. 14B)とを別に示す。

適切な治療法はどれか。

- a 降圧薬投与
- b エピネフリン投与
- c 左室瘤切除術
- d 僧帽弁置換術
- e 上行大動脈置換術

別 冊
No. 14 写真A、図B

22 26歳の男性。強い呼吸困難を主訴に入院した。中学生のころから呼吸困難のため入退院を繰り返しており、薬物治療を受けている。身長168 cm、体重58 kg。脈拍84/分、整。血圧90/58 mmHg。心尖部に最強点を有する3/6度の汎収縮期雑音を聴取する。心カテーテル検査での酸素飽和度は右房56%、肺動脈56%、大腿動脈94%。左室拡張容積は正常の270%、左室駆出率15%。心電図(別冊No. 15 A)、胸部エックス線写真(別冊No. 15 B)および心エコー図(別冊No. 15 C)を別に示す。

適切な治療法はどれか。

- a 心房中隔欠損閉鎖
- b 心室中隔欠損閉鎖
- c カテーテル焼灼
- d 大動脈弁置換
- e 心移植

別 冊
No. 15 図A、写真B、C

23 64歳の男性。歩行時の右下肢痛が増悪してきたために来院した。喫煙歴はない。右大腿動脈の拍動は微弱であり、右足背動脈と後脛骨動脈との拍動を触知しない。3年前に左下腿の切断術を受けている。下肢動脈造影写真(別冊No. 16)を別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 若年男性に多い。
- b 我が国で減少傾向にある。
- c 主な病変部位は末梢の動脈である。
- d β 受容体遮断薬が有効である。
- e 経皮的動脈形成術の適応である。

別 冊
No. 16 写 真

24 1か月の乳児。嘔吐を主訴に来院した。出生体重2,950 g。生後2週から嘔吐が始まり、3週からは哺乳の度に10~15分して嘔吐するようになった。排便は3日に1回である。体重3,320 g。体温36.6℃。呼吸数36/分。脈拍120/分、整。血圧90/62 mmHg。皮膚はやや蒼白で乾燥している。大泉門2×2 cm、平坦。腹部平坦、軟。血清生化学所見：尿素窒素35 mg/dl、Na 132 mEq/l、K 3.4 mEq/l、Cl 88 mEq/l。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.53、PaCO₂ 45 Torr、HCO₃⁻ 33 mEq/l、BE + 7.7 mEq/l。腹部超音波写真(別冊No. 17)を別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 間欠的に啼泣する。
- b 哺乳力は低下している。
- c 吐物に胆汁が混じる。
- d 胃蠕動が観察できる。
- e 灰白色便がみられる。

別 冊
No. 17 写 真

25 54歳の男性。倦怠感と息切れとを主訴に来院した。30歳代から十二指腸潰瘍を指摘され、酸分泌抑制薬による治療を間欠的に受けていた。他に異常は指摘されていない。2年前にヘリコバクター・ピロリ感染を指摘されたが、十二指腸潰瘍が癒痕期であったため、特に治療はしなかった。数日前から倦怠感、易疲労感および労作時の息切れを自覚するようになった。昨日は黒色の固形便があり、今朝は大量の黒色下痢便を排出した。脈拍104/分、整。血圧108/74 mmHg。眼瞼結膜は貧血様。心窩部に軽度の圧痛を認める。

この患者で予測される検査所見はどれか。2つ選べ。

- a Hb 9.3 g/dl
- b MCV 116 μm^3 (基準83~93)
- c BUN 39 mg/dl
- d クレアチニン 3.9 mg/dl
- e CRP 6.5 mg/dl (基準0.3以下)

26 35歳の男性。血便を主訴に来院した。数年前から下顎の違和感と腫脹とを認めていた。同じころから血便を繰り返していたが、数日前から血便の程度が強くなった。血液所見：赤血球320万、Hb11.5 g/dl、血小板17万。注腸造影写真(別冊No. 18A)とパノラマ撮影による顎骨のエックス線写真(別冊No. 18B)とを別に示す。

今後出現が予測されるのはどれか。2つ選べ。

- a 中枢神経症状
- b 口唇色素沈着
- c 難治性下痢
- d 大腸癌
- e 軟部腫瘍

別冊
No. 18 写真A、B

27 23歳の男性。1か月前から続く尾骨部正中からの排膿を主訴に来院した。便通に異常はない。尾骨部正中が3 cm大に腫脹している。中心部に瘻孔があり、排膿を認める。肛門周囲膿瘍と痔瘻とは認めない。

この疾患について誤っているのはどれか。

- a 多毛者に多い。
- b 肥満者に多い。
- c 白人に多い。
- d 毛髪を含んでいることが多い。
- e 抗菌薬投与で治癒する。

28 56歳の女性。肝機能異常を主訴に来院した。5年前の市の健康診査では肝機能異常は指摘されなかったが、1か月前の検査ではALTの軽度上昇と γ -GTPの上昇とを指摘された。輸血歴と薬物服用歴とはない。飲酒歴は機会飲酒。手掌紅斑とくも状血管腫とは認めない。右肋骨弓下に肝は触知しない。血液所見：赤血球420万、Hb13.6 g/dl、Ht36%、血小板24万。血清生化学所見：総蛋白7.5 g/dl、アルブミン4.3 g/dl、総ビリルビン0.8 mg/dl、AST48単位(基準40以下)、ALT65単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ846単位(基準260以下)、 γ -GTP326単位(基準8~50)。HBs抗原(-)、HCV抗体(-)。腹部超音波検査とMRCP(磁気共鳴胆管膵管像)とに異常を認めない。

診断に最も有用なのはどれか。

- a 抗核抗体
- b 抗Jo-1抗体
- c 抗ミトコンドリア抗体
- d 抗平滑筋抗体
- e 抗ミクロゾーム抗体

29 58歳の男性。腹痛と発熱とを主訴に来院した。夕食後2時間で突然に腹痛があり嘔吐した。その後38℃の発熱があった。腹部は平坦であるが、右季肋部に圧痛を認める。肝・脾は触知しない。血液所見：赤血球415万、白血球12,700、血小板23万。血清生化学所見：総蛋白7.2 g/dl、アルブミン4.1 g/dl、総ビリルビン1.3 mg/dl、AST 38 単位(基準40以下)、ALT 48 単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ 326 単位(基準260以下)、 γ -GTP 86 単位(基準8~50)。腹部超音波写真(別冊No. 19)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- (1) 急性胆嚢炎
- (2) 胆嚢結石
- (3) 胆嚢水腫
- (4) 胆嚢捻転
- (5) 胆嚢破裂

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別 冊
No. 19 写 真

30 74歳の女性。胸やけを主訴に来院した。10年前から前屈あるいは高脂肪食摂取で増悪する胸やけの症状があり、制酸薬と酸分泌抑制薬との処方を受けていた。服薬による改善と中断による再燃とを繰り返してきた。食道造影写真(別冊No. 20)を別に示す。

考えられるのはどれか。2つ選べ。

- a 逆流性食道炎
- b 食道憩室
- c 食道裂孔ヘルニア
- d 食道狭窄
- e 食道静脈瘤

別 冊
No. 20 写 真

31 68歳の女性。腹部膨満と軽度の腹痛とを主訴に来院した。2日前から排便がなく、排ガスもほとんどない。20歳代に胃切除を受けているが、詳細は不明である。腹部造影CT(別冊No. 21A、B)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 腹壁癒痕ヘルニア嵌頓
- b 鼠径ヘルニア嵌頓
- c 癒着性イレウス
- d 腸管軸捻転症
- e 腸重積症

別 冊
No. 21 写真A、B

32 52歳の女性。労作時息切れのため来院した。1か月前から息切れを自覚し、最近では駅の階段を昇るのが困難になった。48歳から糖尿病でインスリン治療を受けている。意識は清明。体温36.2℃。脈拍104/分、整。眼瞼結膜は蒼白で眼球結膜に黄染は認めない。下腿に浮腫を認める。血液所見：赤血球230万、Hb7.1g/dl、Ht22%、網赤血球1%、白血球4,000、血小板17万。血清生化学所見：総ビリルビン0.8mg/dl、LDH350単位(基準176~353)、Fe180μg/dl(基準80~160)、フェリチン220ng/ml(基準20~120)。骨髓血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No. 22)を別に示す。

この患者の治療として最も適切なのはどれか。

- a 摘脾術
- b 鉄キレート薬投与
- c シクロスポリン投与
- d 蛋白同化ステロイド薬投与
- e 副腎皮質ステロイド薬投与

別 冊
No. 22 写 真

33 41歳の男性。1週間前から続く易疲労感と鼻出血とを訴えて来院した。眼瞼結膜と口腔粘膜とに貧血を認め、歯肉にも出血を認める。腹部は平坦で肝・脾を触知しない。体温37.6℃。脈拍88/分、整。血圧124/72mmHg。血液所見：赤血球210万、Hb7.1g/dl、Ht23%、網赤血球2%、白血球2,300、血小板2万。血清生化学所見：総蛋白6.8g/dl、アルブミン4.2g/dl、総ビリルビン1.1mg/dl、AST25単位(基準40以下)、ALT19単位(基準35以下)、LDH680単位(基準176~353)。骨髓血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No. 23)を別に示す。

適切な治療法はどれか。

- a 多剤併用化学療法
- b シクロスポリン投与
- c ステロイドパルス療法
- d インターフェロン投与
- e 全トランス型レチノイン酸投与

別 冊
No. 23 写 真

34 66歳の男性。発熱と意識障害とのため来院し、直ちに入院した。1週前から37℃台の発熱が続き、昨日から家族との会話に支障をきたすようになった。2か月前に冠動脈狭窄に対して冠動脈ステント留置術を受けた。その後、再狭窄予防のため抗血小板薬の投与を受けていた。呼びかけに応じるが話す内容にまとまりがない。体温38.2℃。脈拍112/分、整。血圧130/86 mmHg。眼瞼結膜は蒼白で眼球結膜に黄染を認める。血液所見：赤血球270万、Hb 7.8 g/dl、Ht 25%、網赤血球56%、白血球6,700、血小板3万。末梢血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No. 24)を別に示す。

考えられる検査所見はどれか。

- a 好中球アルカリホスファターゼ(NAP)スコア低値
- b 血清尿素窒素高値
- c 血清CK高値
- d 直接Coombs試験陽性
- e 骨髓低形成

別 冊
No. 24 写 真

35 生後5日の新生児。在胎39週4日、出生体重は3,210 gで、仮死はなかった。出生時から後頸部に腫瘤が認められている。生後3日から時々少量の鼻出血に気付かれている。家族歴に特記すべきことはない。血液所見：赤血球320万、Hb 9.8 g/dl、白血球9,200、血小板2.2万。プロトロンビン時間(PT)16秒(基準対照11.3)、APTT 73秒(基準対照32.2)。血清生化学所見：総ビリルビン8.1 mg/dl、AST 48単位(基準40以下)、ALT 32単位(基準35以下)、LDH 450単位(基準170~580)。後頸部腫瘤の写真(別冊No. 25)を別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 血清FDPは正常である。
- b Coombs試験は陽性である。
- c ビタミンKの欠乏がみられる。
- d 骨髓での血球産生は抑制されている。
- e 血漿フィブリノゲンは低下している。

別 冊
No. 25 写 真

36 6歳の男児。血尿を指摘され来院した。2週前から腹痛と膝関節痛とがみられ、3日後から下腿に皮疹が出現したため近医で治療を受けていた。昨日顕微鏡的血尿を指摘され紹介された。血圧 98/46 mmHg。腹痛と関節痛とは訴えない。下腿に皮疹を認める。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、沈渣に赤血球 30~40/1視野、白血球 0~1/1視野。血液所見：赤血球 430 万、白血球 9,600、血小板 28 万。出血時間 2分30秒(基準対照3分以下)、プロトロンビン時間(PT) 11.0秒(基準対照 11.3)、APTT 31.6秒(基準対照 32.2)。血清生化学所見：総蛋白 7.2 g/dl、アルブミン 3.7 g/dl、尿素窒素 13 mg/dl、クレアチニン 0.6 mg/dl、総コレステロール 160 mg/dl。免疫学的所見：ASO 333 単位(基準 250 以下)。抗核抗体陰性。CH 50 32 単位(基準 25~35)。来院時の下腿の写真(別冊No. 26)を別に示す。

この腎疾患について正しいのはどれか。

- a 学校検尿で発見されることが多い。
- b 小児期慢性腎不全の最大の原因である。
- c ペニシリンの長期内服が必要である。
- d 合併症としてうっ血性心不全がある。
- e 血尿のみの例は予後が良い。

別 冊
No. 26 写 真

37 78歳の男性。全身倦怠感を主訴に来院した。10年以上前に尿蛋白と高血圧とを指摘された。血清クレアチニン値も徐々に上昇してきた。数週前から全身倦怠感と食欲不振とが出現した。血圧 174/86 mmHg。眼瞼結膜の貧血と下腿浮腫とを認める。血清生化学所見：尿素窒素 73 mg/dl、クレアチニン 6.8 mg/dl。

この患者の血液検査所見で考えにくいのはどれか。

- a Na 132 mEq/l
- b K 5.5 mEq/l
- c Ca 7.2 mg/dl
- d P 6.3 mg/dl
- e HCO_3^- 32 mEq/l

38 35歳の男性。悪寒戦慄を伴う 39℃ の発熱、頻尿および排尿時痛のため来院した。3日前から排尿時痛と会陰部不快感とがあったが放置していた。

最も考えられるのはどれか。

- a 急性腎盂腎炎
- b 急性膀胱炎
- c 尿道炎
- d 急性前立腺炎
- e 急性精巣上体(副睪丸)炎

39 71歳の男性。前立腺肥大症の診断で経尿道的前立腺切除術を受けた。病理組織診断で2切片に高分化腺癌が認められた。

今後の方針として最も適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b ホルモン療法
- c 放射線療法
- d 癌化学療法
- e 前立腺全摘除術

40 24歳の女性。下腹部痛と腹部膨隆とを主訴に来院した。未婚、未妊。12歳初経。月経周期28日型、整。1か月前から下腹部に鈍痛を感じていたが、2週間前から下腹部全体が膨隆し、3日前から37.8℃の発熱が持続している。来院時、臍を頂点とする硬い腫瘤を触れる。尿中hCG検査陰性。血液検査と血清生化学検査とに異常を認めない。腫瘍マーカー： α -フェトプロテイン(AFP)28,000 ng/ml(基準20以下)、CEA 2.0 ng/ml(基準5以下)、CA 19-9 28 U/ml(基準37以下)、CA 125 82 U/ml(基準35以下)。腹部超音波検査で腫瘤はほとんど充実性である。骨盤部MRIのT₂強調像(別冊No. 27)を別に示す。

まず行うべき治療はどれか。

- a 卵巣腫瘍核出術
- b 患側付属器摘出術
- c 単純子宮全摘出術および両側付属器摘出術
- d 癌化学療法
- e 放射線療法

別冊
No. 27 写真

41 18歳の女子。初経が発来しないため来院した。身長160 cm、体重52 kg。乳房や外陰の二次性徴は正常であるが、膣が完全に欠損している。基礎体温は2相性である。末梢血を用いた染色体検査の結果(別冊No. 28)を別に示す。

正しいのはどれか。

- a Wolff管の形成不全である。
- b 卵巣性無月経である。
- c 女性仮性半陰陽である。
- d 性腺無形成症である。
- e ゴナドトロピン分泌は正常である。

別冊
No. 28 写真

42 7歳の女儿。3歳でオムツがとれたにもかかわらず、下着が常に少し濡れていることを主訴に来院した。本人はお漏らしはしていないという。静脈性尿路造影では両側に完全重複腎盂尿管を認める。膀胱鏡検査で右側に2個、左側に1個の尿管口を認める。

尿失禁の原因はどれか。

- a 下大静脈後尿管
- b 膀胱尿管逆流
- c 尿管異所開口
- d 尿管瘤
- e 後部尿道弁

43 26歳の男性。最近ものが見えにくくなったため来院した。頭部単純MRIのT₁強調矢状断像(別冊No. 29)を別に示す。

考えにくいのはどれか。

- a 髄膜腫
- b 神経膠腫
- c 下垂体腺腫
- d 頭蓋咽頭腫
- e 松果体部腫瘍

別 冊
No. 29 写 真

44 生後4か月の乳児。呼吸が苦しそうなので母親に連れられて来院した。呼吸数52回/分、シーソー呼吸である。体は柔らかく、四肢体幹は弛緩している。頸定は認めず、あやすとよく笑い、母親と他人の区別がつく。舌の表面にうごめくような筋の攣縮が認められる。深部反射は消失している。血清CK 38単位(基準10~40)。

この患児で考えられるのはどれか。

- a 先天性筋ジストロフィー症
- b Becker型進行性筋ジストロフィー症
- c Duchenne型進行性筋ジストロフィー症
- d Kugelberg-Welander病
- e Werdnig-Hoffmann病

45 6歳の男児。跛行と左大腿部の運動痛とを主訴に、母親に連れられて来院した。

3日前に母親が跛行に気づき聞いたところ、1か月前から運動をしたとき左大腿部に軽い痛みがあったとのことである。既往歴に特記することはない。左股関節の可動域制限と軽度の跛行とがある。血液検査所見に異常はない。両股関節エックス線単純写真(別冊No. 30)を別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 両側発症が多い。
- b 発症頻度に性差はない。
- c 装具療法が有効である。
- d 軟骨代謝異常を伴う。
- e 年少児の方が年長児より予後が良い。

別 冊
No. 30 写 真

46 57歳の男性。1週前から頭痛があり、家族に支えられて来院した。約1か月前、飲酒後転倒して頭部を打撲した。軽度の見当識障害を認める。体温、呼吸、脈拍および血圧に異常はない。項部硬直はない。右上肢の挙上ができず、右下肢の脱力のため起立保持ができない。深部反射は右上下肢で亢進している。頭部単純CT(別冊No. 31)を別に示す。

この患者に最も適切な治療法はどれか。

- a 抗菌薬投与
- b 脳浮腫治療薬投与
- c 穿頭ドレナージ
- d 脳室ドレナージ
- e 開頭術

別 冊
No. 31 写 真

47 44歳の男性。両手が不自由になったことを主訴に来院した。10年前から徐々に両手に力が入らなくなり、2、3年前から両手の筋肉がやせてきた。熱い風呂の湯加減を手でみようとするときや、誤って火のついた煙草を手にとしたときなど、手に火傷を負ったことがこれまで何回かあった。意識は清明、痴呆はない。両上肢遠位部の筋萎縮と筋力低下、両上肢の深部反射消失、両下肢の深部反射亢進および両側の Babinski 徴候陽性を認める。痛覚と温度覚とが著しく鈍麻している部位(別冊No. 32A)を別に示す。視力・聴力障害、構音・嚥下障害、排尿障害および触覚・深部感覚の鈍麻を認めない。頸部MRIのT₂強調正中矢状断像(別冊No. 32B)と横断像(別冊No. 32C)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 脊髓空洞症
- b 脊柱管狭窄症
- c 後縦靱帯骨化症
- d 筋萎縮性側索硬化症
- e 脊髄性進行性筋萎縮症

別 冊
No. 32 図A、写真B、C

48 52歳の女性。1週間からの動悸を主訴に来院した。発汗が多く、易疲労感がある。身長162 cm、体重52 kg。体温37.4℃。脈拍104/分、整。血圧162/72 mmHg。皮膚は湿潤し、手指に振戦を認める。頸部にびまん性の痛みのない甲状腺腫を触知する。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球420万、Hb13.0 g/dl、Ht37%、白血球5,000、血小板20万。血清生化学所見：尿素窒素10 mg/dl、クレアチニン0.7 mg/dl、総コレステロール105 mg/dl、AST30単位(基準40以下)、ALT25単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ420単位(基準260以下)、 γ -GTP30単位(基準8~50)、Na138 mEq/l、K4.0 mEq/l、Cl99 mEq/l、Ca9.8 mg/dl。TSH0.1 μ U/ml以下(基準0.2~4.0)、遊離サイロキシン4.3 ng/dl(基準0.8~1.8)。甲状腺¹²³I摂取率24時間値6%(基準10~40)。

診断はどれか。

- a Basedow病
- b Plummer病
- c 甲状腺乳頭癌
- d 無痛性甲状腺炎
- e 甲状腺悪性リンパ腫

49 38歳の女性。筋力低下を主訴に来院した。数年前から、長距離を歩くと下肢に力が入らなくなった。その後も筋力の低下は次第に強まり、最近では、駅の階段を昇ることができなくなり、下肢がつることもある。また、同じころから、夜間に数回排尿のために目覚めるようになった。身長158 cm、体重50 kg。脈拍80/分、整。血圧178/100 mmHg。筋力は上下肢とも低下しているが、筋萎縮はない。

この患者で低値が予想されるのはどれか。2つ選べ。

- a 血清カリウム濃度
- b 血漿コルチゾール濃度
- c 血漿レニン活性
- d 尿中17-OHCS排泄量
- e 尿中VMA排泄量

50 45歳の女性。喘鳴を主訴に来院した。3か月前から喘鳴があり、徐々に増悪してきた。最近、誘因なく発作性に皮膚が紅潮するようになった。身長158 cm、体重51 kg。脈拍92/分、整。血圧130/88 mmHg。尿所見：蛋白1+、糖(-)、潜血(-)。血清生化学所見：空腹時血糖102 mg/dl、総蛋白7.1 g/dl、アルブミン4.3 g/dl、尿素窒素12 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、Na139 mEq/l、K4.0 mEq/l、Cl101 mEq/l、Ca9.8 mg/dl。尿中5-ヒドロキシインドール酢酸(5-HIAA)25.2 mg/日(基準1.0~6.0)。胸部エックス線写真で右肺に腫瘤陰影があり、腹部ダイナミックCTで早期濃染を呈する多発性の肝腫瘤を認める。

この患者の腫瘤について正しいのはどれか。

- a 甲状腺C細胞に由来する。
- b 神経内分泌細胞に由来する。
- c カテコラミンを産生する。
- d ステロイドホルモンを産生する。
- e ホルモン受容体異常がある。

51 28歳の初妊婦。妊娠16週時にはじめて尿糖陽性を指摘され、2週後の随時血糖値が162 mg/dlと高値を示したため紹介された。生来健康。父に糖尿病がある。身長158 cm、体重58 kg。血圧124/62 mmHg。眼底は異常なく、浮腫も認めない。75 gブドウ糖負荷試験：静脈血前値112 mg/dl、1時間値218 mg/dl、2時間値202 mg/dl。

この患者で正しいのはどれか。

- (1) 妊娠糖尿病と診断できる。
- (2) 巨大児分娩のリスクがある。
- (3) 経口血糖降下薬の適応である。
- (4) 将来糖尿病を発症するリスクは低い。
- (5) 妊娠末期にはインスリン抵抗性が軽減する。

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

52 2歳6か月の女兒。歩行障害と下肢の変形とを主訴に受診した。母親の妊娠・出産歴に特記すべきことはない。7か月までは母乳で育てられ順調に成長していた。母親は患児を祖父に預けて農作業をしていた。祖父は病弱でほとんど外出することがなく、家の中で生活していた。患児は1歳ころから肘をついて這っていた。1歳6か月ころから背部が突出する変形がみられ、さらに下肢の変形を伴い、歩行できないため受診した。下肢の写真(別冊No. 33A)と手根骨エックス線写真(別冊No. 33B)とを別に示す。

この疾患の血清で低値が予想されるのはどれか。2つ選べ。

- a 磷
- b 25-(OH)D₃
- c クレアチニン
- d 副甲状腺ホルモン
- e アルカリホスファターゼ

別 冊
No. 33 写真A、B

53 65歳の男性。手指の蒼白化と階段昇降時の息切れとを主訴に来院した。5年前の冬から寒冷時に手指が蒼白になり、紫色に変色することに気付いている。1か月前から指先の皮膚に潰瘍が出現した。また、手指と顔面とのむくみと胸やけとを自覚している。脈拍72/分、整。血圧120/74 mmHg。両側上下肢の末梢から1/3までと顔面とに皮膚硬化を認める。指先に皮膚の陥凹を認める。聴診上、両下肺にfine crackles(捻髪音)を聴取する。尿所見：蛋白(－)、潜血(－)。血液所見：赤血球420万、Hb 14.0 g/dl、白血球6,500、血小板22万。血清生化学所見：総蛋白7.2 g/dl、尿素窒素16 mg/dl、クレアチニン1.0 mg/dl。免疫学所見：CRP 0.1 mg/dl(基準0.3以下)、抗核抗体10,240倍(基準20以下)、抗セントロメア抗体(+)、抗Scl-70抗体(－)。

この患者で考えられるのはどれか。2つ選べ。

- a 脳血管障害
- b 食道蠕動運動低下
- c 間質性肺炎
- d 肺血流障害
- e 強皮症腎

54 9歳の女児。発熱と皮疹とを主訴に来院した。5日前から高熱があり近医で抗菌薬を投与されたが解熱せず、2日前から皮疹も出現してきた。皮疹は発熱時に増強する。体温40.2℃。脈拍120/分、整。両側頸部に径15mmのリンパ節を数個ずつ触知する。心雑音はない。肝を右肋骨弓下に3cm、脾を左肋骨弓下に2cm触知する。関節腫脹は認めない。尿所見：蛋白(－)、糖(－)、潜血(－)。血液所見：赤沈110mm/1時間、赤血球310万、Hb9.5g/dl、Ht29%、白血球21,200(桿状核好中球9%、分葉核好中球59%、好酸球3%、単球3%、リンパ球26%)、血小板52万。免疫学所見：CRP20.5mg/dl(基準0.3以下)、ASO500単位(基準250以下)、リウマトイド因子陰性、抗核抗体陰性。咽頭培養は常在菌のみ、血液培養は陰性。入院から治療までの3日間の体温表(別冊No. 34)を別に示す。

この疾患に特徴的な皮疹はどれか。

- a じんま疹
- b 蝶形紅斑
- c 点状出血斑
- d リウマチ疹
- e 輪状紅斑

別冊
No. 34 図

55 24歳の女性。独語と興奮とが激しいために家族とともに救急車で来院した。既往歴と家族歴とに特記することはない。大学卒業後商社に就職、未婚。1週前に咽頭痛、咳および発熱のために感冒薬の投与を受けたが、その後も咽頭痛が続いた。今朝37.5℃の発熱があり頭痛を訴えた。昼ころから多弁になり意味不明の言動が多くなり、興奮も強くなった。来院時、急性錯乱状態で、話しかけても全く意思疎通ができない。運動麻痺はなく深部反射に異常を認めない。

対応としてまず行うのはどれか。

- (1) 眼底検査を行った上で腰椎穿刺をする。
- (2) 血清ウイルス抗体価を検査する。
- (3) ジアゼパムを静脈内投与する。
- (4) インドメタシンを投与する。
- (5) アシクロビルを投与する。

- a (1)、(2)、(3) b (1)、(2)、(5) c (1)、(4)、(5)
- d (2)、(3)、(4) e (3)、(4)、(5)

56 4か月の乳児。2日前から鼻汁と咳嗽とがあり、次第に咳嗽が増強し、喘鳴を伴ったため来院した。アレルギー性疾患の家族歴はない。呼吸数48/分。鼻翼呼吸があり、聴診でfine crackles(捻髪音)とwheezesとを認める。白血球5,000。CRP0.2mg/dl(基準0.3以下)。RSウイルス抗原陽性。

この疾患で正しいのはどれか。

- (1) 夏季に流行する。
- (2) 吸気性の呼吸困難である。
- (3) 気管支拡張薬の吸入が有効である。
- (4) 酸素テントに収容する。
- (5) ネブライザーで加湿する。

- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

57 72歳の男性。腹部全体の激痛と出血性下痢とを主訴に来院した。昨日昼ころから腹痛と下痢とが始まった。便中からベロ毒素産生菌が検出され入院した。入院後も下痢症状が続いている。血液所見：赤血球 290 万、Hb 10.0 g/dl、Ht 28%。破碎赤血球を認める。血清生化学所見：尿素窒素 34 mg/dl、クレアチニン 1.8 mg/dl。

適切な治療方針はどれか。

- a 強力な止痢薬を投与する。
- b 広域スペクトル抗菌薬を投与する。
- c 補液で水分と電解質とを補う。
- d 透析療法を速やかに行う。
- e 輸血でヘモグロビン 12 g/dl を保つ。

58 65歳の男性。右下腿の激痛と腫脹とのために救急車で搬入された。7日前に農作業中に右足に怪我をしたが、自分で創の処置をしていた。4日前から右足の発赤、腫脹および疼痛が始まり、急速に増悪した。2日前から耐え難いほどの激痛となり、悪臭を放つようになったが、病院に行くことを拒否し続けていた。既往歴には高血圧がある。右下肢は青紫色で著明に腫脹し、悪臭を発している。意識は清明。体温 39.2℃。脈拍 104/分、整。血圧 180/96 mmHg。血液所見：赤血球 420 万、白血球 18,500、血小板 12 万。血清 FDP 18 μg/ml (基準 10 以下)。CRP 38 mg/dl (基準 0.3 以下)。来院時の両側下腿エックス線単純写真(別冊No. 35)を別に示す。

適切な処置はどれか。2つ選べ。

- a 右大腿切断術
- b 抗血清の投与
- c 高圧酸素療法
- d 抗凝固薬の投与
- e 経口抗菌薬の投与

別冊
No. 35 写真

59 60歳の男性。咯血を主訴に来院した。6か月前から、軽度の咳と喀痰とが出現し、徐々に増悪傾向にあった。1、2か月前からは微熱、盗汗および全身倦怠が出現した。2、3日前から咳とともに少量の血痰があった。今朝、約 50 cc の咯血を認めた。23 歳ころ、肺結核で1年間治療を受けた。55 歳ころに尿糖を指摘されたが放置していた。意識は清明。身長 172 cm、体重 42 kg。体温 37.2℃。呼吸数 24/分。脈拍 88/分、整。血圧 132/88 mmHg。チアノーゼは認めない。胸部聴診では、右上肺で呼吸音の気管支呼吸音化が認められ、同部に coarse crackles を聴取する。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。下肢に浮腫を認めない。尿所見：蛋白(一)、糖(+)。血液所見：赤沈 35 mm/1 時間。赤血球 450 万、Hb 13.4 g/dl、Ht 42%、白血球 8,900。血清生化学所見：空腹時血糖 155 mg/dl、総蛋白 6.2 g/dl。CRP 1.5 mg/dl (基準 0.3 以下)。胸部単純 CT(別冊No. 36)を別に示す。

考えられるのはどれか。2つ選べ。

- a 慢性気管支炎
- b 気管支拡張症
- c 非結核性抗酸菌症
- d 特発性間質性肺炎
- e 肺好酸球性肉芽腫症

別冊
No. 36 写真

60 21歳の男性。意識障害で下宿の友人に伴われて救急車で搬入された。午後1時から5時ころまで水田の農薬散布を保護具なしで手伝った。6時ころから多量の発汗と唾液分泌、嘔吐および下痢があり、めまいと頭痛とを訴えて意識が混濁した。身長165 cm、体重58 kg。体温36.0℃。脈拍48/分、整。血圧100/58 mmHg。縮瞳を認める。皮膚は湿潤していて発赤はない。骨格筋の線維性攣縮がある。腹部は平坦で、肝・脾は触知せず抵抗を認めない。尿所見：外観は正常、蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球500万、白血球6,200、血小板32万。血清生化学所見：アルブミン4.8 g/dl、クレアチニン1.1 mg/dl、総ビリルビン0.8 mg/dl、AST 35単位(基準40以下)、ALT 30単位(基準35以下)、LDH 300単位(基準176～353)、ALP 200単位(基準260以下)、 γ -GTP 30単位(基準8～50)、コリンエステラーゼ40単位(基準400～800)、アミラーゼ40単位(基準37～100)、CK 20単位(基準10～40)。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：PaO₂ 98 Torr、PaCO₂ 40 Torr。

原因として考えられる農薬はどれか。

- a アミノ酸系
- b アニリン系
- c パラコート
- d 有機塩素系
- e 有機リン系

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受 験 番 号	氏 名 (楷 書 で 書 く こ と)